

町長

ひとりごと

70

齊藤

讓



夏のあの猛暑が、まるで嘘のように思えるほど、静かな静かな里の秋である。爽やかな風の流れや、野辺に咲く秋の草花の可憐な風情が、萎えていた私達の体や心に、また再び生への息吹を呼び起こしてくれた。大自然の慈しき、偉大さに感謝と畏敬の念を持たずにはいられない。同時にまた、自然に囲まれた農村に住む幸を、しみじみと噛みしめている。

日毎深まりゆく秋の気配の中には、すでに冬の到来の間近さを予感させる鈍い影が宿っている。自然が織りなす四季の移ろいの確さに、新たな感動を覚える。

▼それに引換え、人間社会の営みは、何と小さく、愚かしいことか。

いま、国の内外に重要

▼この時に聞く築前琵琶奏

い気もする。

姿を述べ、それが、夕暮れの鐘の音とともに一ひら一ひら散りゆく桜花を連想させ、人生の衰れをしみじみと感得させてくれる。

平家一門というより、平清盛を中国、日本の昔の叛逆者と同列とし、暴力によって国を奪い、一時の栄華を誇った者が滅び去ってゆく運命を語っており、武人としていさぎよく散っていった平家公達への減びを



馬翁が塞

「これが福にならないとは限りませんよ」といった。その人の家には良馬が増えた。その子息は乗馬が好きで、馬を乗りまわしているうちに落ちて股の骨を折った。近所の人々がなぐさめに行く、その人は「これが福にはならないとは限りませんよ」といった。

▼ところで、私にはふだん心に秘めている素直な言葉がある。なかなか実践は難しいのであるが、好きな言葉である。

怒りと恨みに震えるときは、鏡をみよう
顔も言葉も整えられる
悲しみと苦しみにおののくときは
仏を拝もう
心も身も整えられる

—松原泰道—

「この平家物語の冒頭の

一連一句は、生きとし生けるもの、栄えているものは全て移ろいゆき、衰えゆくものであるというこの世の

▼一年たったとき、胡の者が大挙して攻め込んできた。若者達は弓を引いて戦った。そして要塞の近くに住む人は十人のうち九人までが死んだ。ところがその息子

だけ脚が悪かったために戦いに駆り出されることなく、親子共無事であった。このように福が禍になり、禍が福になることとは、なかなか極めがたく、測りがたいものである。「塞翁が馬」という言葉は、この寓話から出た。吉凶禍福の定めがたいこと、また吉凶禍福の転変は予測できないことであるから、禍も悲しむにはあたらず、福も喜ぶにはあたらぬということを意味する言葉である。

・・・・